



【勝利の人生のため(4): 平和の福音の備え】

今日の聖書本文-エペソ人への手紙 6章10-15節/暗唱聖句-ルカの福音書 10章 17節

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん!一週間もみなさんに主の平安がありましたか。今日は特に「父の日感謝礼拝」として捧げています。今年も日々愛する家族のため忙しくて疲れている教会のお父さんたちの上に神様からの健康と豊かな御恵みが注がれますよう主イエスキリストの御名によって祝福し、お祈り申し上げます。

<本論>

愛するクリスチャンプレイズチャーチの兄弟姉妹のみなさん!私たちは最近勝利する人生になるため様々な霊的な戦いに勝利する原則を聖書を通して連続学ばされています。‘神様の全身武具(ぶぐ)’を確実に身につけて戦っていますか。今日もサタンはほえたける獅子のように食い尽くすものを捜し求めながら歩き回っていると聖書は言っています。そしてかならず私とみなさんの前に今日、もしかすると明日、それか一週間ずっと戦いが襲おうかも知れません。すでにイエスキリストの十字架の恵みに包まれた勝利を得るため私たちはなにもせず、何もせず、何もせず、ただじっといれば勝利の人生になると言うてはおられません。すでに打ち勝つてあるイエスキリストの勝利が今日自分の勝利になるため神様は私たちにただ自分の身に全身武具をつけなさいと命令されています。軍人が武具を着けるというのは一番基本の基本だけど、目の前に始まろうとしている戦いのために備える事だと申しました。ですから信仰生活においても何か特別な新しい何かを求めようとしないで、神様の御言葉に堅く立ってイエスキリストの中心、御言葉の中心の信仰そのものをつかまえるようにと伝えました。今日は神様の全身武具第三目聖書の本文6章 15 節に書かれている‘平安の福音の備えをはきなさい。’についてともに学んで行きましょう。

<ローマ時代の皮の靴 >

ローマ時代の軍人だちがはいた靴というのはサンダルみたいな物で、足をひもでちゃんと縛れる物でした。靴の底にはすべらないように金具(かなぐ)まで打たれていたそうです。このように靴をちゃんとそなえておくことが当時ローマ軍人にとっては何よりも大切なことでした。ある歴史家はローマ軍隊があれだけ成功しつづけたのは彼らがはいた靴のためだと主張するほどでした。当時ローマ軍隊が強かった理由の一つがまさしく他の国の軍人たちははけなかった靴をはくことにより、けわしいところでの戦いにでも打ち勝つことができたのです。ですからほかの人々が見た時戦いにおいてローマ軍人がはいていた靴はそんなに大切だとは思えなかったかも知れませんが、まさにこの靴をはいたため勝利にまで至ることができた一つの原因となったという事実は私たちにいろいろと考えさせられることが多いです。

<福音とは?>

まずみなさん!福音とは何ですか。それは簡単で、単純です。それはイエスキリストが私たちの罪のため苦しめられ、十字架で死なれ、復活されたということです。そして昇天されたイエス様は裁きのために再び来られることです。だれでも心から自分の罪をイエスキリストに悔い改め、そのイエスキリストを自分の救い主として信じ、受け入れればすべての罪は赦され、救われるだけではなく、この福音において自由にされ日々神様の平安を味わいながら生きることができるということです。今日の本文には平和の福音だと教えて下さっています。今日人々が神様のまことの平安を味わえずに生きている理由はこの福音に預かっていないからです。

<自分の罪の靴をぬいで福音の靴をはきましょう>

ですから私たちがもう一度確認すべきことがあります。それは何でしょうか。まずもし今も自分の過去と汚い罪のくつをはいているのであれば、まず惜しまず、心残らず大胆にその靴はぬがなければなりません。そして主にあつて平和の福音のそなえられた新しい靴ではきがえなければなりません。自分自身のきたない罪の靴をぬいだ時ようやく平和の福音のそなえをはいて霊的戦いに出て勝利をあげることができるでしょう。

出エジプト記三章でモーセはホレブ山のある木の炎(ほのお)で臨まれ、モーセを呼んで下さる神様に近づこうとした時、神様

はモーセにこうめいれいされました。5 節【神は仰せられた。「ここに近づいてはいけない。あなたの足のくつを脱げ。あなたの立っている場所は、聖なる地である。】

愛するみなさん、なぜ神様はモーセにはいていた足のくつをぬけ！と命令されたと思いますか。よく御言葉を推測すれば、創世記を読んでみれば、始めの人間アダムとエバが神様と交わりながら罪を知らなかった時は何も着る服も、はく靴もありませんでした。別にそういうものがなくても何も恥ずかしく思われなかったです。しかし、自分たちの目に見える通りに、願う通りに神様の欲に従ってしまい、神様の御言葉に逆らった罪の結果以後、服を着初めました。その時、呪われた地で歩くために靴みたいな物も始まったのではないかと思います。ですから、罪人である人が神様に近づくために自分の靴！つまり、自分の過去の罪、自分の欲、自分の高ぶり、自分の基準や経験などを神様の御前ですべて脱いで、へりくだって神様からの御心、御言葉、神様への信仰を新しく身に着けるようにと行うことであつたと信じます。

コロサイ人への手紙3章8節-10節では“しかし今は、あなたがたも、すべてこれらのこと、すなわち、怒り、憤り、悪意、そしり、あなたがたの口からでる恥ずべくことばを、捨ててしまいなさい。互いに偽りを言うてはいけません。あなたがたは、古い人をその行いと一緒に脱ぎ捨てて、新しい人を着たのです。新しい人は、造り主のかたちに似せられてますます新しくされ、真の知識に至るのです。”この御言葉はまさしく自分の罪の靴を脱ぎ捨ててイエスキリストによる新しい靴をはく者に向かって与えられる御言葉なのです。神様は今日も私たちにこの世で続けられている霊的戦いでの勝利のために“あなたがたは平和の福音の備えをはきなさい”と命令されておられます。そのために、まず、今まで自分がはいた自分の靴を脱いでおかなければなりません。

<福音は動くものだ。— moving Good News >

さて、神様はいったいどうしてこの平和の福音をくつにたとえて言われたのでしょうか。軍人にとって靴は足を守ることに意外にもっと大切な意味は戦って勝利のためにすばやく動くためではないでしょうか。素早く、どんな所でも自由に動きながらたたくためであります。

今日悪魔は聖徒の足を縛ろうとしています。なぜなら福音を伝えないようにするためです。いくらどんなに完全に武装されていたとしても足にあしかせがつけられているなら、軍人は自由に動けないし、戦うことができません。ですから**私たちが神様の軍人として自由に動き、戦うためには福音の備えられた靴をはくべきです。**これはつまり福音は止まってはいけない**移動性(いどうせい)**を意味します。福音の備えをはいて移動すること、動くことはつまり伝道することだと言えるでしょう。

このイエスキリストの平和の福音の靴をはいた多くのイエス様の人々が歩きまわしながらこの福音を述べ伝えて下さったゆえに今日我々にまでもこのキリストの愛と平和が届くようになったことを忘れてはいけません。この町の中で、日本で、世界の中で私たちを通して伝えられる平和の福音を切に待ち望んでいる人々が今も多く待っていることもいつも覚えなければなりません。

<伝道は自分を武装させ強められる。>

今日の御言葉を通して神の福音を述べ伝えること！つまり伝道はただ神様の地上最大な命令だから仕方なくしなければならぬことではないことがわかります。今日の御言葉を通して悟らされることは福音を熱心に伝えれば伝えるほどそれはだれよりも実は自分自身が強められ、神様の福音によって武装されるということです。福音を伝えることはほかの人々を生かすのみならず、自分自身をも生かす道である意味も含めています。

愛するみなさん、一度考えてみてください。実際伝道や宣教に熱心な教会の信徒たちは試練と試みにおちいて倒れることはめったにありません。大体伝道すれば勝利します。むしろ動いていて力があるこの福音が教会に止まっているときこそ教会と信徒たちの間によその多くの問題が起きていることを目撃しているのではありませんか！

現代のある教会はこの平和の福音を伝えるのに熱心にしようとしません。それどころか、神様を信じているといいながらこの福音を伝えることを面倒くさく思ったり、恥ずかしく思う場合も少なくあります。

今日時々(ときどき)神様の力ある福音が教会に閉(と)じ込(こ)められ教会の外に流されないようにとむしろ信徒たちが止めているような印象があるのはどうしてでしょうか。そうしながら神様の心はどうかには何の関心もなくただ、交わりばかり、

学びばかりしながら教会の外ではまったく平和と愛、救いの福音を流さないまま生きるクリスチャンの二重性が私たちにはないのか我々は顧みるべきです。ほかの教会はどうであれ、私たちクリスチャンプレイズチャーチは続けて平和の福音の備えをはいて活発に動き前進して行きますように切にお祈り申し上げます。

第二テモテ人への手紙 4章 2節を読んで見ましょう。【みことばを宣べつたえなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。】

愛するみなさん!最近伝道したことがありますか。伝導する前にはとにかくときどきして、緊張して、なぜか恥ずかしいし、不安の状態ですが、伝道から帰る時は自信がついて、感謝と喜びに満ちて帰ってくるではありませんか。!結局平和の福音の備えをはいて福音を述べ伝える時、実際恵みと喜びの祝福は自分自身に与えられるということを体験することができます。

ルカの福音書 10章 17節-20節をご一緒に開いて見ましょう。どなたが読んでくださいますか。ここで、悪霊どもがイエス様の弟子たちに服従したのはいつでしたか。いつイエス様の弟子たちは勝利を味わいましたか。平和の福音の備えをはいて町中を歩き回りながら福音を伝えたそのときでした。イエス様の弟子たちは伝道するときこそ、敵のすべての力をやぶるイエス様の権威を経験することができたのです。(ルカ 10:17-【さて、七十人が喜んで帰って来て、こう言った。「主よ。あなたの御名を使うと、悪霊どもでさえ服従します。】)

使徒の働き 4章 20節ではイエス様に出会い、体験した弟子たちがなんと告白していますか。

【私たちは、自分の見たこと、また聞いたことを、話さないわけには行きません。】イエスに出会って信じた弟子たちはたとい迫害の中でも神様の福音を語らざるをえないと告白しています。

みなさんはイエス様を心から信じていますか。福音の備えをはいているのであればこれから私たちは大胆に前をすすもうではありませんか。何よりも自分自身の信仰が強められるためにも、そして日々勝利するためにも必要ではないでしょうか。

＜福音の備えをはいて行くために必要な 二つの姿勢!＞

次は、福音の備えをはいて前をすすむにつれて忘れてはいけない二つの大切なことがあります。**ルカの福音書15章の放蕩息子(ほうとうむすこ)のたとえ話**を通して伝道の大切な原則を学ぶことができます。

一つは**神様の心を抱いて進むこと**です。

愛するみなさんは今神様の御心を知っていますか。罪人に対する御心、失われた羊を思う御心、主のご自分の民に対する願いもわかることができます。神様の御心がわかれば、今も神様は失った一匹の羊を探し出し、一日も早くもどって来てほしいのかがわかって来ると思います。するとだれから言われなくても私たちは自然に伝道と宣教中心に変えられるのではないのでしょうか。これがただしい順番なのです。

ルカの福音書 15章 4節、7節【あなたがたのうちに羊を百匹持っている人がいて、そのうちの一匹をなくしたら、その人は九十九匹を野原に残して、いなくなった一匹を見つけるまで捜し歩かないでしょうか。7節:あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人にまさる喜びが天にあるのです。】

ですから、私たちはまず、神様の御心をもっと知ろうと努力するべきです。そこからはじめ、伝道にすすむべくです。私たちはいつかから伝道というのはまるで、特別なプログラムや行事みたいになっていうものではありませんか。しかしそうではありません。伝道というのは神様に出会ったあつい愛からスタートしなければなりません。

ルカの福音書15章を見て見てください。父は家を出た息子が帰ってくる姿をみてまずどうしましたか。**20節**です。“走りよって彼を抱(だ)き、口づけした。”と書いてあります。“あ、わが息子が帰って来た!”と言いながら家に向かって来てる息子に走ります。なぜですか。息子に対する愛の心がそれほど切なる心だったからです。お父さんである神様の愛の心を私たちが知るとその愛のゆえに私たちの胸が熱くなるはずです。

神様の愛から始まった福音の備えは父なる神の愛のゆえに私たちの足取りを軽くさせるのです。

もう一つは**待つ心をもつこと**です。魂を救おうとするならかならず、待たなければなりません。待つ時こそ魂を救うことができます。気が短い人は魂を救うことがむずかしいです。放蕩息子が父のところに帰ることができた理由は何でしたか。父なら自分を待っててくれるだろうという信仰があったからではないでしょうか。待ってくれる父がいたからこそ放蕩息子も帰ること

ができたのです。ですから私たちも教会においても待つてあげれる姿勢が必要です。ある人に対して期待をもって祈りながら、待つてあげれば、その魂はかならず主に戻れます。教会では特にこの信仰の姿勢が必要とされると思います。

皆さんに一つ質問します。教会は試験を受けるところでしょうか。それとも訓練を受けるところでしょうか。試験はある程度決まった時間に 60 点という基準の点数をきめ、点数以上は合格、以下は失格で判断されやると一日で終わることができます。ところが訓練というのは何ですか。座っている50人がみんな60点以上になるようにさせることです。いくら頑張ってもできない人だとしても 10 回でも 20 回でも繰り返し、できる時までさせるのが訓練なのです。みなさん。教会は訓練するところであることを忘れなしてください。多くの人々は教会を試験場だと錯覚します。

“イエスを信じている人がなぜあんなに行動するの?” “あの人でもリーダーなのか。”このようにいつも判定し評価して合格、失格を決めてしまいます。しかしそれは教会ではありません。足りない人、弱い人、まだ確信がない人がいたとしても彼らが自分で立つ事ができるときまで忍耐をもって待ち、助けてあげるべきなのです。みなさん、一緒について言って下さいますか。 “ 待っただけ魂を救い出せる。”

<結論>

最後に使徒パウロが召される前、自分の人生を振り替えてみながら告白した手紙を読んで終わりたいですがどなたが**第二テモテ 4:6-8 節**を読んで見て下さい。使徒パウロは召される前、自分はいまや注ぎの供え物となると告白しました。自分の持っている知識、経験、能力、命、すべてをキリストの祭壇に注ぎだしたいといいました。私もこのような牧会者になりたいです。足りない者ですが、私自身もパウロのようにこの日本の地において一生涯主の福音を語り、のべ伝えるものとして 用いられます。まだ一度もイエスを聞いたことがないまま死の道をでい歩んでいる日本の魂に最後まで福音を語ったあと、消(き)え去(さ)る炎(ほのお)のように、主の前に呼ばれていきたいのが私の懇切な願いです。

愛するクリスチャンプレイズチャーチの皆さん！私たち一人、一人がすっかり磨(す)り減(へ)ってつかえなくなるもののように人生の最後の最後までイエスのために用いられる者になりましょう。人生を生きていく中神様の福音のために自分たちのすべてをささげ続けたあげく神様に**“神様、これ以上ささげることはありません。”**と告白することができる聖徒になりましょう。これ以上ささげることがないまで主のために生きようと決心しましょう。神様は福音のために生きている人々をいかに愛してくださるのでしょうか。これからこの平和の福音を備えて、この真理の福音をもって行く準備ができましたか。今週一週間も神様のこのすばらしいお知らせを大胆に語りつつ、勝利と感激を味わうみなさんとなりますように主イエスキリストの御名によって祝福します。アーメン!